

茅葺き屋根のある暮らしのサイクルを再生する取組

……西岬海辺の里づくり協議会【千葉県館山市】



団体設立経緯

「西岬海辺の里づくり協議会」は2009年、千葉大学が千葉県館山市塩見地区に残る茅葺き民家「ゴンジロウ」をお借りしたことをきっかけに地元住民有志、市職員、千葉大学教員、学生をメンバーとして設立されました。協議会は、「茅葺き古民家を拠点として「茅屋根の手入れ」といったケアプロセスを通して多様な協働の場をつくりだし、地域コミュニティに基づく美しい里の景観を維持しながら、新しいコミュニティ運営の形を探ること」を目標に活動しています。

これまで活動拠点である茅葺き民家ゴンジロウのケアから始まって、地元住民と学生が話し合いや里歩きを重ねながら地域のことを学び、現状の課題解決や集落の将来について共に考え活動範囲を徐々に集落全体へと広げて来ました。現在も月に1回程度メンバーが集まり、話し合う協議会を継続して開催しており、積極的に活動を行なっています。

設立年月 …… 2009年10月

メンバー数 …… 20人

代表者名 …… 小金 晴男(こがね・はるお)

連絡先 〒294-0302 千葉県館山市塩見349 岡部 明子

メールアドレス aokab@k.u-tokyo.ac.jp

ホームページ <http://okabelab.wixsite.com/okabelab>

facebookページ

<http://www.facebook.com/Okabekukan/?ref=bookmarks>

<団体のミッション>

私達は千葉県館山市塩見地区に唯一残る茅葺き民家ゴ

ンジロウを拠点に、同古民家の茅屋根手入れなどの活動

を通して多様な協働の場を作り、美しい里の景観を維持し

ながら、新しいコミュニティ運営の形を探っています。

地域概要

塩見集落は、千葉県館山市の中心部から車で15分ほどの距離に位置する西岬地区の中の集落の1つです。塩見は千年以上前から続く集落と言われており、豊かな里山と里海に囲まれた地形を活かして、長い間半農半漁の生活をしながら暮らし継いできました。

現在では人口約200人、世帯数約100世帯の規模の集落となっています。他の農村地域と同様に少子高齢化が進み1990年と比べると人口は75%まで減少しており、高齢化率も47.9%と館山市の他の地区よりも高い割合ですが、交通の便がよいため新規移住者や別荘所有者が増加し、人口の4割近くを占めているのもこの地区の特徴の1つです。人口が減少し、昔から続く里の風景が失われてしまったわけではなく、昔と比べて耕作放棄地や荒れ地が増加しつつありますが、住民の手の届く範囲では現在もきちんと手入れされた美しい里の風景が広がっています。

活動に至った背景や理由

西岬海辺の里づくり協議会では2009年から活動を開始しました。これまで集落に唯一残る茅葺き民家「ゴンジロウ」をなんとか守るために、地元住民と学生が協力して茅を集落内外であちこち探し歩いて集め、茅が少なっても何とかなる段葺きという葺き方を用いてきました。自分たちで収穫出来た茅の量に応じて毎年少しずつ茅屋根を葺き替えて、集落内外の人が集うコミュニティの拠点として整備してきました。2015年に毎年続けてきた屋根の葺き替えが一周しました。茅葺き民家が40軒ほどあった70年ほど前に、暮らしに組み込まれていた山裾の茅場を、コミュニティ総出で守り、茅を刈り、刈った茅を里に運び、屋根を葺き替えるという“茅葺き屋根のある里の風景”を再生することを目指しています。そのために、集落内の茅場を再生しています。

活動内容と成果

茅場の再生と来年度屋根の葺き替えをするための茅材の確保

1. 茅場探検ワークショップの実施

かつて集落の40軒ほどの家がほとんど茅葺き民家だった頃は、集落背後の山では地元住民によって茅、薪、木材や食料などの資源調達が行なわれ、さらに子どもたちの遊び場としても活用されるなど多様な利用がされていました。しかし集落での暮らしの変化とともに山利用は減少し、現在では山を利用する人はほとんどなくなりました。山に続く道も手入れが行き届かずほぼ塞がっていましたため、地元住民でも山に立ち入る事自体が困難となっていました。自分の持ち山の様子すら分からず状態となっていました。

そこで昨年度行なった「茅場探検ワークショップ」では、現在立ち入り困難となっている山に地元住民と学生が協力して入り、かつて利用されていた山奥の茅場を探すとともに、現在の山の状態を確認し、新たな2カ所の茅場再生候補地を発見することができました。

しかし今年度6月に行なった茅探検ワークショップにて、長年活動に関わっていただいている茅職人の方に改めて昨年度発見した2カ所の再生候補地を確認して



頂いたところ、2カ所の候補地に生えていた植物は本来屋根材として使われる「ススキ」や「ヨシ」に良く似た「オギ」と呼ばれる植物で、非常に固く重いため屋根材として使うことは難しいことがわかりました。「ヨシ」と一緒に湿地帯に生えていることが多い、地元住民の方でも見抜くことが難しいとのことで、今回の茅探検ワークショップでは茅職人の方に茅の見分け方を教わると共に、再生可能な茅場探しを改めて行ない、新たに1カ所の茅場再生候補地を発見することができました。

2. 茅刈りワークショップの実施

塩見集落内での茅の収穫量を増やして、ゴンジロウの茅葺き屋根の材料となる茅を安定して手に入れるために茅場を整備する茅刈りワークショップを企画しました。茅刈りは第1回と第2回に分けて計3カ所の茅場で行ない、第1回と第2回を合わせて地元住民と学生計30名が参加しました。

第1回茅刈りワークショップは、今年度茅探検ワークショップで発見した新たな茅場再生候補地で行ないました。この茅場は元々田んぼとして利用されていたものが放棄され、空き地となっていたところにまとまって「ヨシ」が生えてきた茅場です。山地や斜面地に群生する「ススキ」などの“山茅”とは違い、平地で水はけの良い湿地に生えるため“海茅”と呼ばれています。山茅よりも細く真っすぐな棒状で、葺き方が異なります。新たに見つけた茅場は、田んぼとしての利用を止めてから長年放置されていたため茅以外の植物が多く混在しており、茅場の面積は広かったものの、刈り取った面積のうち約半分は屋根材としては使えない植物だったため、収穫できた茅束は約40束ほどでした。毎年継続して茅刈りを続けて整備していくことで少しずつ茅の割合を増やし、今後茅場として利用できるようになることが見込まれます。

第2回茅刈りワークショップでは、これまで6年間毎年刈り続けてきたゴンジロウのオーナーが所有している小さな茅場の整備を行ないました。前回茅刈りを行なった海茅の茅場とは異なり、今では数が少なくなってしまった山茅が採れる貴重な茅場で、集落内で今でもまとまつた山茅が採れる茅場は、このゴンジロウのオーナーの茅場だけです。6年ほど前から継続的に茅刈りを行なってきた茅場では、毎年安定して50～70束程度の茅を収穫できるようになりました。また茅刈りの最中に、茅場の隣の敷地奥に放棄された元田んぼの空き地に海茅がまとまって生えているのを発見しました。田んぼの持ち主に許可を取り、急遽新たに発見した第2の茅場再生候補地の整備も行ない、およそ60束の茅束を収穫することができました。

2年間の茅場再生の活動を通して、屋根の葺替えが茅場の再生にまで広がるに至り、世代間連鎖のなかで古民家があることを身を持って知ることができました。過去世代の暮らしのおかげで今の里山と古民家の環境があり、現在世代の私たちが活動していることは、将来世代の環境をつくることにつながっています。今後も“茅葺き屋根のある里の風景”を残してゆくことでこの土地の豊かさを継承していきたいと思います



茅葺き民家「ゴンジロウ」を地域内外の人々が気軽に立ち寄れる “地域のお茶の間”とするための継続的な活用

1. かや茶会の実施

今年度の活動の始まりと茅葺き民家ゴンジロウを多くの方に知っていただくため、ゴンジロウをお茶室にしたお茶会イベントを6月に開催しました。集落の交流拠点としてのゴンジロウ活用の試みを兼ねた催しとして、2010年から2012年までこれまで過去3回行なってきたイベントです。学生を中心となって茶室をデザインし実施したかや茶会には、地元住民、OB・OGなど総勢40名以上が参加しました。



2. かやぶき夏祭りの実施

地元塩見の夏祭りが行なわれる時期に合わせ、ゴンジロウでも夏祭りを実施しました。地元住民の方の所有する山から竹を頂き、それを使った10m超のコースを作成し、ゴンジロウの前庭で流し素麺とスイカ割りを行ないました。集落内外から多くの人が参加し交流できる機会や、岡部研究室のメンバー以外の学生が地元の方と交流する機会は少ないので、夏祭りを通してこのような機会をつくることで、塩見集落の魅力を多くの人に発信していきたいと思いました。



3. ゴンジロウ秋の収穫祭の実施

11月には、集落の里山風景再生のための取り組みの一環として、集落の休耕地の一部をお借りし春から育ってきたナガイモとサツマイモが実を結び、収穫祭を実施することができました。普段なかなか来ることのできない学生に代わって、畑をやっている地元住民の方が水やりなどの世話をしてくれたおかげで、多くの実りを得ることができました。収穫した芋を学生が調理して振る舞い、日頃の感謝を示すと共に、このような催しを継続して実施してきたことで徐々に催しへの参加者も増え、活動の輪の広がりを感じることのできる機会となりました。



4. 餅つき会の実施

今年度の活動の締めくくりとして、茅葺き民家ゴンジロウにて餅つき会を開催しました。餅つき会は3年ほど前から毎年春に行なっており、地元住民と毎年交代わりする学生が顔を合わせて交流する機会となっています。学生が地元の方にやり方を教えていただきながら一緒に餅をつき食べることで、より両者の交流を深めることができました。

今回の餅つき会では、ゴンジロウの母屋の縁側と板の間をステージとしてセッティングし、塩見集落のフラバンドの方々によるライブ演奏も催しました。ゴンジロウが住民の方々の活動の場としても積極的に活用され、“地域のお茶の間”となるように今後も様々な活用方法を模索していきます。



課題と解決策

活動を行なっている際に、茅場再生候補地の確保という課題にぶつかりました。かつて茅を収穫していた山裾の茅場は既に立ち入りが不可能になり、再生させるには多大な資金と人手が必要だということです。茅探検ワークショップでは、まとまった面積の山茅の茅場を新たに見つけることはできませんでしたが、新たな海茅の茅場として耕作放棄地を整備していくことが可能であることがわかりました。今後は山茅から海茅へと屋根材をシフトチェンジしていくことで、“茅葺き屋根のある里の風景”を維持していくことにしました。海茅の茅場は山茅の茅場と違い、所有者が明確な上、平地で民家のすぐそばにあるため、今後所有者の都合によっては売却や用地変更に伴い茅場の維持が難しくなります。所有者の理解を得て今後も茅場を維持していくことができるよう、更に活動の認知度を高めつつ、多くの人を巻き込みながら続けていきたいと思います。



今後の予定

来年度も継続して茅場の再生活動に取り組んで行くとともに、秋以降、刈り貯めた茅を使って屋根の葺き替えワークショップを実施します。一度全面の葺き替えを終えた屋根はあと数年は雨漏りなく保つと思われますが、“茅刈り”“葺き替え”というこの地の文化を繋いでいくために、今後は今ある茅でできる範囲を毎年少しづつ継続して葺き替えていきます。同時に集落住民の方々と一緒に塩見やゴンジロウについて考えるワークショップを開催し、共にまちのシナリオを検討していきたいと思います。